

りんご農家の委託醸造による シードル振興の取組

■背景とねらい

南信州では約10年前からシードル生産が始まり、現在6か所の醸造所が稼働し、自社醸造だけでなく受託でもシードルを生産している。

シードル醸造量を確保するため、新たに委託醸造を希望するりんご農家の掘り起こしを目指した。

■本年度の取組と成果

1 目指す委託醸造の姿

委託醸造を進めるにあたり、現状の課題を聞き取り調査したところ、委託醸造農家は2極化しており、販売に苦勞している農家では、マーケティング戦略が欠落していたり、農業経営上の明確な目的や計画を持っていないことがわかってきた。

2 酒販免許の取得支援

りんご農家が委託醸造で作ったシードルを販売するためには酒類販売業免許の取得が必要である。

委託醸造を希望する農家に、酒税法から免許の概要、取得のための手続きなど、南信州シードル協議会と（公財）南信州・飯田産業センターが企画する免許取得のための研修会の情報を提供した。

3 新鮮組のシードル研究支援

りんご農家が多い下條村農業青年クラブ「新鮮組」に対し、シードルの委託醸造のポイントや酒類販売業免許取得手続きのほか、シードルに合う料理や食事との合わせ方、販売方法や客層の分析などを支援した。



シードルの原料となるりんご

■今後の課題と対応

りんご農家に対し、シードル販売も含めた農業経営モデルを作成し、経営の多角化を支援していく。
(阿南支所：高橋 博久)

グリーン・ツーリズム活動の 再構築に向けた取組

■背景とねらい

管内のグリーン・ツーリズムをけん引してきた「この指とまれつながり逢いの会」は、会員の高齢化に伴い世代交代が必要となっている。その一方で、地域おこし協力隊を経て農家民宿を開業する若い宿泊事業者も増えてきた。

そこで両者の情報を共有し、南信州のグリーン・ツーリズムのあり方を検討した。

■本年度の取組と成果

1 F A Xを活用した会員のつながりの維持

高齢会員が多い「この指とまれつながり逢いの会」では、新型コロナウイルス感染防止のため、役員会や研修会を実施することができなかった。

そこで会員間のつながりを維持するため、個々に報告いただいた近況をF A Xを使って全会員に再送信することを提案し、年間で22回の報告が集まった。この取組は、自宅で孤立した毎日を過ごす会員の不安解消とつながりの維持に役立った。

2 意見交換会の開催

「この指とまれつながり逢いの会」の今後を考えるために、若い宿泊事業者から経営方針や集客方法、情報発信の状況を聞くとともに、農作業体験の場の提供など、連携の在り方を確認した。

3 若い宿泊事業者のネットワーク化支援

最近開業した農家民宿3戸を対象にした、ゆるやかにつながる情報交換会を企画した。参加した3軒の経営者は、繁忙期と閑散期、それぞれの対応方法やネットを使った集客方法、チラシの作り方など、良い情報交換ができた。

■今後の課題と対応

「この指とまれつながり逢いの会」のノウハウをどのように若い宿泊事業者につなげていくか、南信州におけるグリーン・ツーリズムの新しい展開方法を模索しながら担い手育成を目指す。

(阿南支所：高橋 博久)

まめっこ応援団の活動支援 (阿智村)

■背景とねらい

阿智村内の未就園児の親子を対象として、農作業や農産物の加工体験を通じて食の大切さを知る「まめっこクラブ」に毎年多くの親子が参加している。その活動を支援するため、村内の女性農業者を中心として「まめっこ応援団」を結成し、農作業や農産物加工の技術指導、畑の管理等を実施しており、支援センターにおいても栽培技術指導を担い、応援団の活動支援を行った。

■本年度の取組と成果

1 食育体験の活動支援

本年も4月から月1回の頻度で年間活動計画を立て、専用ほ場において、大豆「あやみどり」や野菜類（キャベツ、ネギ等）の栽培を行った。

参加人数は、未満児から2歳児までの親子13組27名で、播種から収穫までの作業体験を行い、収穫物は自宅へ持ち帰って旬の野菜を味わっていただいた。

野菜栽培はほぼ計画どおりに実施されたが、新型コロナウイルスの感染防止の観点から、密を避けて短時間での開催となり、参加者の作業が少ない分、応援団がその作業を担って実施した。

味噌及び大豆の加工は、密閉空間での作業になるため、応援団のみで加工作業を行い、参加者へ配布するなど、例年どおりの活動はできなかった。



作業の様子

■今後の課題と対応

応援団の構成員が高齢化しており、活動を継承する次世代の人材育成に取り組みながら、引き続き食育活動を支援する。(地域第三係:安藤 忠幸)

小学生の大豆「つぶほまれ」栽培 (飯田市)

■背景とねらい

つぶほまれ栽培・加工研究会(事務局:南信州・飯田産業センター)の呼びかけにより、大豆加工会社・JA・飯田市農業課とともに、市内小学校2校の2年生に対し、大豆栽培を通しての食育活動を実施した。小学生から農作物を栽培することにより、農や土へ親しみ、自分で育てた大豆による農産物加工まで体験できるよう計画し、関係機関とともに栽培技術指導等の支援を行った。

■本年度の取組と成果

1 「つぶほまれ」学習会のプレゼンテーション

大豆栽培を始める前に、両小学校とも大豆の栽培や加工などを事前学習していた。その一環として、「つぶほまれ」の特徴を農業農村支援センター、大豆の栄養価や加工方法などを大豆加工会社、加工技術について産業センターでそれぞれ担当し、授業を行った。

2 大豆「つぶほまれ」の栽培体験

A小は6月16日播種、多くのメディアも取材に来た中で実施された。開花期に当たる8月の雨不足により不稔が発生し、収穫ができなかった。

B小は6月22日播種、12月2日収穫を支援した。面積3aに対して収穫量は3kgであったが、刈取、乾燥、脱穀と全ての作業体験を行った。収穫した大豆は節分の豆まきに利用した。

3 加工体験

大豆加工会社から提供された地元産「つぶほまれ」を使って、A小はきな粉、B小は炒り豆に加工し、児童全員に配布した。

■今後の課題と対応

今年度は7月の長雨や8月の高温干ばつにより思うような収穫が得られず、小学生の学習意欲に水を差してしまった。例年安定した収穫が体験できるよう、関係機関と連携し、食育における農作物栽培を支援していく。

(地域第二係:小原 繁)